自然に還れる場所

高知県日高村　特定非営利活動法人 日高わのわ会

「還る」場所がある。「帰る・還る」という言葉には「もといた場所に戻る」という意味があるが、「還る」には「根源となるところに戻る」というニュアンスがある。四国山地と西日本最高峰の山から流れる日本一の清流「仁淀川」。美しい山々と美しい川に囲まれ、自然と共にあった時代に還ったような気持ちにさせてくれる日高村。そこには、誰もがその人らしく在れる、地域活動の取り組みがあった。

人口約５０００人の高知県高岡郡日高村。ここに特定非営利活動法人日高わのわ会（以下「わのわ会」）がある。「年をとっても障がいをもってもその人らしく暮らせる日高村」をミッションに、地域の誰もが出番と居場所と働ける場を提供している。

そんな「わのわ会」立ち上げのきっかけは、現在、事務局長をしている安岡千春さんが、子育て支援センターで保育士だった頃に遡る。地域の保健師の方と、「子育て中でも誰かの役に立ちたい」という思いを持っていたお母さんたちと共に行った、紙芝居づくりがきっかけだった。お母さん方がそれぞれの力を持ち寄り、紙芝居を成功させた体験が、活動の原点であり、「できる人が、できる時間に、できることを」という経営理念のもとにもなった。

その後も、地域のお母さんたちが中心となり、子育てのちょっとした「こまりごと」をみんなでシェアして解決していく活動を続けていたが、次第に活動範囲が「福祉」「喫茶」「農作業」などへと広がる。それを受け２００５年にＮＰＯ法人となり、現在では、喫茶店営業を担当する「喫茶部」、障がい者就労支援などの「福祉部」、地元特産のトマトなどを加工する「販売部」、村の駅の清掃や農作業請負などの「総務部」、託児ルームなどを運営する「児童福祉部」の五つに分かれて事業を実施している。また、１４００年以上の歴史を持つ小村神社の２００ｍの参道や境内を使って、お祭りを復活させた。

とことん日高村に向き合っている事務局長の安岡さんに、日高村への思いについて聞くと「自分が生まれ育った場所で、小さい頃から川で魚を捕まえたり、山で秘密基地を作ったりしていた。そんな自然が豊かな日高村から出たいとは思わなかったし、大切にしたいと思っている」と語ってくれた。近年では、「eat&stay とまとと」という移住促進用のゲストハウス運営の事業を村から委託され、日高村を外に開く活動も行っている。

日高村の伝統を守り、生活基盤を支え、新たな移住者を迎え入れる。日高村の過去、現在、未来を「わのわ会」が担っているといっても大げさではないかもしれない。それを示すように、地域活動団体として先駆的な取り組みを評価され、内閣総理大臣賞をはじめ、様々な賞を受賞している。

取材の中で、日高村の未来を作っている、一般社団法人nosson代表の小野加央里さんに話を聞いた。小野さんは、東京で会社員をしながら様々な地域活動に取り組む中で、２０１６年に「わのわ会」を知り、活動に参加。２０１９年には日高村に移住し、２０２０年、「わのわ会」の一部事業を独立した形で「nosson」を立ち上げた。東京から移住するほど「わのわ会」の活動にコミットすることになったきっかけは、事務局長の安岡さんとの出会いだった。

「社会のものさしは関係なく、自分がどう思うかが大事で、そんな自分をそのままでいさせてくれた」。東京での暮らしの中で、「こうすべき」「こうあるべき」のように、外の評価に違

和感を持っていたという小野さん。そんな時に、安岡さんの考え方はとても新鮮で心に深く響くものだった。「わのわ会」からスピンオフした形で生まれた「nosson」でも、安岡さんの考え方は受け継がれ、それが「自分らしく生きる人を増やす」というビジョンに表れている。

「わのわ会」をここまで大きくした安岡さんにご自身について伺うと、母親の話をしてくれた。安岡さんが高校生だった頃、一時期学校に行かなくなった。代わりに、学校に行く途中にあった母親が当時勤めていた職場に行き、仕事が終わるまで車の中で待っていた。そんな時も特別怒ることもなく、いつも通り接してくれた。そんな母親からは、どんな境遇の中で生まれたとしても、最終的には「同じ人間だよね」という考えが大切であることを教わった。この考えは、「わのわ会」が、子どもや障がいのある方、高齢の方など、誰も置き去りにしない活動をしていることに通じている。

顔の見える関係性の中で、ちょっとした「こまりごと」をみんなでシェアし、お互いのできないところをお互いのできるところで補いながら助け合っていく。楽しい時も、嬉しい時も、そうでない時も、お互いに対等で無理なく楽しく支え合っている。そんな昔から培ってきたコミュニティのあり方を、現代に合わせた形で行い、20年余りも続いている「わのわ会」。

フランスの思想家ルソーの考えを要約した標語に「自然に還れ」というものがある。そんな、理性でなく感性でコミュニティが豊かになっている場所が、日高村にあった。

【連絡先】
日高わのわ村（代表・安岡千春さん）
メール：hidakawanowa@ca.pikara.ne.jp